



## 東日本大震災と日越関係の今、そして明日

うめもと ち さ こ  
梅本 千佐子

日本語教師、在ベトナム・ハイフォン市

ベトナム北部の港湾都市・ハイフォンに活動拠点を移した3年前、スーパーに出かけて、パンコーナーに群がる黒山の人だかりに目が点になったのを、今も鮮明に覚えている。おいしいと評判の焼きたてフランスパンを求める人たちだったのだ。順番も何もない。我がちにゲットしようとする熱気に圧倒され、なかなか前に近づけなかったが、誰も「どうぞ」とは言ってくれない。これではいつまでも朝食用のパンが買えないと気づき、果敢に突進して人をかきわけ、カウンターのスタッフに向かって、「(フランスパンを)3本!!」と叫んでいた。その1年後くらいに、客を並ばせるための柵ができ、警備員が配置されて黒山はなくなったが、今でもレジ前での割り込みはしばしばある。指導する生徒たちのために日本語能力試験の受験願書を出しに、ハノイの大学に行った折も、一つしかない窓口に入人が殺到して、どこが列の前か後ろか判然とせず、後方から文字通り“頭越し”に出される書類を平然と受け取る係官に業を煮やしたものだ。この光景は今も変わっていないらしい。とにかく、「並ぶ」ことが苦手な人たちがだなどというのが、ベトナムに暮らす私の印象だ。

東日本大震災発生以来、私は当地で、テレビやインターネットを通して時々刻々伝わる母国の深刻な事態を、息を呑む思いで見つめてきた。家族や友人知人、平和な日常、自然豊かな地域の暮らしを奪われた被災地の方々の様子を知るにつけ、その自制的な態度に秘められた、お一人おひとりの悲しみ、怒りはいかにばかりか -- と思う。「日本人は未曾有の困難に直面しながらも、秩序を重んじて冷静沈着に行動し、互いに譲り合い助け合

って対応している」と、世界中から賞賛の声があがったが、私も当地の幾人かに「ベトナム人には絶対真似のできない行動だ。もし、ここで同様の災害が発生したら、秩序が乱れて大変な事態になるだろう」と言われた。上記の体験からすると、むべなるかなという気もする。むろん、この国に限ったことではない。

3月下旬から、私は家庭教師の仕事が新たに加わった。相手は日本に住むベトナム人一家の児童2人とその母親。母親は当地出身で、大震災発生後、災害の影響を不安視する親族の呼び寄せで里帰りしているものである。子どもは、日本の公立小学校に通っていた3年生の兄と4月入学の弟だが、6月下旬に日本に戻った後の途中編入になるため、勉強の遅れを心配した親の希望で、日本人教師の私が彼らの指導をすることになったのだ。月～金の午前中、彼らが滞在している母親の実家まで私が出向き、「国語(日本語)」と算数の学習指導をするとともに、若い母親には初級教材を用いての日本語支援も行っている。教科書は、日本に残る父親が地元の小学校から取り寄せ、送ってよこしたものだ。

この仕事の話は、ある日突然舞い込んできた。住まいの近くを歩いていた時、歩道で屋台を開いている女性から、「日本に住んでいて、今こちらに帰っている親戚の子どもたちの勉強をみてやってくれないか」と急に話しかけられたのだ。彼女の仕事場の前をよく通ってはいたが、これまで言葉を交わしたことはなかった。だから突然の要請に戸惑い、また、私が日本人であること、教師を

していることをどうして知っているのかといふが、あらためてベトナム社会の口コミの威力を実感させられることとなった。

兄弟は、兄が生後間もなく日本に渡り、弟は日本で生まれ育っているの、第一言語は日本語である。母国語のベトナム語は話せるが、まだ読み書きはできない。対する母親は、8年日本に在留しているが、日本語学校等で学ぶ機会を逸してきたため、日本語での読み書きは全くできないし、会話力もあまりあるとは言えない。父親は、会話は問題ないが、やはり読み書きはできないと聞く。私は仕事柄からも、自身の体験からも、外国で長期に暮らす場合、生活上のコミュニケーションの手段として、また仕事等を成功に導くためにも、その国の言語習得が大きな課題であると感じているのだが--。

この一家の住む自治体では、17万人弱の人口のうち、外国人は5,400人近くおり、市のホームページには、日本語以外にベトナム語を含む5言語版の「生活ガイド」が掲載されていた。市国際交流協会では日本語教室も開設されているとのこと。言葉の問題や経済的事情などで就学に困難をきたしがちな外国人児童の学習支援を行う補習教室も開かれているようで、私が指導している兄弟も通っているらしい。

上記のことから、外国籍住民への支援体制は一応整っているのではないかと思われるが、3ヶ月近く兄弟やその母親とつきあってきて感じるのは、外国人児童を受け入れている日本の学校や補習教室と親とのコミュニケーションは十分とれているのだろうかということである。小3の男児は、興味も拡散して集中が続かず、すぐに机を離れて動き回る。学習内容が難しかったり、解答でつまずくと、「もう嫌だ!!」と大泣きし、背中を向けて「学習継続断固拒否」の態度を示す。おそらく、多動性の発達障害ではないかと推測されるのだが（むろん、専門家でない者が軽々に判断すべきでない。家族は「わがままな子」という認識だ）、小学校のクラスや補習教室では以前どのような状態だったのかと尋ねたところ、母親はむずかしい日本語が理解できないため、担任教師とほとんど話したことはないし、子どもが学校からもらってくる文書や通知表の内容もわからないと言う。

日本では2005年に「発達障害者支援法」が制定されたが、「発達障害」について、まだまだ社会

的に広く理解されているとは言えず、ベトナムでは、支援事業はほとんど手付かずの状態である。私が関わってきた一家の子どもが、今後、法律に則った支援環境に恵まれ、「日本で育ち、教育を受けてよかった」と思えるような状況になることを祈るばかりだ。

法務省入国管理局の統計によると、2009年現在の在日外国人登録者総数は218万6,121人。国籍別でベトナムは第9位の41,000人である。1990年の在日ベトナム人はわずか6,316人で、2000年は16,908人。20年間で日本とベトナムとの結びつきが急激に深まっていることを示す数字だ。私の日本語の教え子の何人かも、今日本にいる。そのうちの一人（女性）は震災後の4月はじめに、大学院入学を目指して大阪に向かった。心配する親兄弟を説き伏せ、「日本でビジネスを学びたい。日本が第二次大戦後、短期間でこれほどの経済大国になったのはなぜか。そのことを知りたい。また、質の高いサービスの手法を実地に学びたい」という志を抱いての旅立ちである。来年当地に進出予定の長野県の中小企業に採用され、本社工場で年末まで研修を受けるため、5月中旬に日本へ渡った男性もいる。ベトナムでの事業立ち上げに際して、即戦力になることを期待されてのものだ。

私の教え子たちを含む在日ベトナム人は、大震災を身近に体験し、災害の恐ろしさを実感するとともに、被災地での救援活動、原発事故対応、復旧支援の様子をテレビ等でつぶさに見ながら、日本人と日本という国について多々感じてきたことだろう。その思いは口コミをはじめいろいろな手段を通じて母国の人々に広く伝わっていくはずだ。さらに、地域復興・再生への今後の道のりは、緊密な日越（日本 ベトナム）関係の明日を担う両国の若い人材が育つ上で、必ずやいい影響をもたらすものと思う。

さて、福島第一原発事故を受けて、エネルギー政策を見直す国々がある一方で、ベトナム政府は3月中旬にいち早く「2030年までに8基の原発を建設する計画に変更はない」と表明した。拡大を続ける電力需要に対応するには原発は欠かせないとの認識だ。民意が反映されにくい一党独裁の国だが、国民の不安を考慮し安全対策の強化案も打ち出した。ちなみに、日本は官民挙げてのセールスにより、昨年ベトナムで原発2基の建設を受注しており、ベトナムの政府側はこの件でも引き続き日本との協力関係を推進する意向である。